

論文審査結果

本論文は、初期（原始）仏教から大乘仏教、さらに日本仏教の祖師日蓮に及ぶ仏教福祉思想を現代における福祉実践の視点から考察し、仏教福祉の行為主体がもつべき基本的な思考と行動のモデルを論じている。包括的な論究の一貫性は、ゴータマ・ブッダ釈尊が生きとし生けるものすべての「アルタ（利益）・ヒタ（福祉）・スカ（安楽）」を願ったという福祉思想的視点からの考察である。仏教福祉思想は個性・特性ある多くの糸に縊りあわされている。その1本が初期仏教—法華経—日蓮に繋がる糸である。今日の多くの法華経系の新仏教（宗教）教団が、内外に社会貢献を積極的に展開していることもその糸に繋がるものである。その点からも初期仏教から一貫して日蓮に至る福祉思想を解明する意義は大きい。仏教思想が現代に活かされるために、仏教語や思想の現代的・合理的解釈が必要となる。本論文においても特色ある解釈が見られる。本論第2章において、大乘菩薩乗としての仏教福祉の思考・行動モデルを提示し、その上で、六波羅蜜の「忍辱 (ksanti)」の語義にモニエルのサンスクリット辞典に載せる *patient waiting for anything* から「寛容であること」「(何かを) 待つ」というニュアンスがあることを指摘し、現代社会におけるその重要性を述べている。

仏教経論を原典に至るまで丹念に解き明かし、その中で福祉関連思想を文献的・思想的に解明している点は、斯学会の研究状況と照らし合わせても、基礎的な研究として高く評価される。一部審査委員からは感嘆を込めて「マニアックな注記のとり方」と称された詳細で丁寧な文献（テキスト）の提示は仏教学にも見られる手法であるが、パーリ文献やサンスクリットテキストならびに漢訳資料・日蓮遺文などの原文提示は仏教（福祉）研究者にとって非常に有益なものである。取り扱われた仏典の引用はすべて仏教教理上の肝要と考えられる重要箇所である。本論文の個性は第3～4章に際立つ。第3章では、『法華経』を、釈尊と弟子等の「対話」というコンテクストから捉え仏教福祉的なソーシャルワークのモデルを検討している点は独創性があり評価できる。法華経における福祉思想はこれまでも論じられているが、日本仏教僧のなかで日蓮の福祉思想を論じるものは少ない。第4章での、日蓮の消息（手紙）類をカウンセリングやグリーフケアの視点から捉えることによる現代的意義の指摘は、これからの日蓮の福祉思想のさらなる関心を促すことになるであろう。その意味において、本研究の意義は高く評価されよう。また本論文は終章において、これまで対比（対立的）に捉えられていた日蓮と忍性とが共に慈悲行を実践した仏教者であるとして、その思想的類似性・相同性を指摘していることも新提案として興味深いものがある。また、仏教福祉の思想を解明していく中で、随所において現代の社会福祉・ソーシャルワーク関連思想と仏教思想の関連性について考察を加えている点は、仏教思想の現代的展開という点からも重要な視点である。ただし本研究は、仏教の福祉思想を全般的に網羅しているわけではない。その意味で書籍化する際にはサブタイトルなどで具体化するとよいであろう。この基礎的研究に加えて、仏教思想全体の目指すものと社会福祉思想の統合という視点でさらなる研究の進捗を期待している。

以上のように、本論文は、これまでの研究成果を踏まえてさらに独自の視点から綿密な資料検討に基づいて考察されており、今後の仏教福祉研究に貢献しえる優れた研究成果であると評価する。

平成 25 年 11 月 1 日（金）に、立正大学熊谷キャンパス内アカデミックキューブ 6 階、小会議室において審査委員全員出席のもとで実施された最終試験において学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、審査委員会は当該論文が博士（社会福祉学）として十分な内容であると判定した。

以上